
異世界からの勇者と闇の皇女

土岐宮 左京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界からの勇者と闇の皇女

〔ZΠ-〕

N
8
2
4
5
Y

【作者名】

土岐宮
左京

【おひさま】

平々凡々に生きていた時坂陽一は突然異世界に召喚される。

黒世界に奇跡が待つ。ある日、口不き、手不取、心不思の三才の魔術師が現れる。それを機に、これまでの人生を余儀なくされた陽の物語です。

ありきたりな異世界召喚モノだと思います。

主人公は最強かつ無双、ご都合主義、設定は後載せ、残酷な描写や
ハーレム等があります。
読まれる際には「」注意ください。

第一話

異世界召喚。

それは今生きるこの世界とは別の全く異なる世界に呼び出されるひと。

小説や漫画など物語の世界では時々見られる想像上の出来事。

「…………く？」

俺はその言葉を聞いたとき、呼氣のような言葉にならない声を上げてしまつた。

その言葉とは、異世界召喚モノの小説や漫画でよく田口ひじ、ゲームでは音声付きで見た言葉。

異なる世界から問答無用で呼び出した者にかける第一声として有名な、いや悪評高い言葉。

「お待ちしてしました、勇者さま。じつか、どうか私たちをお救いください。」「

田の前にひざまずき、手を合わせ拝むように懇願を口にする少女。その少女が懇願する様は神にすがる弱者のようであり、英雄を虜にする娼婦のようでもあった。

普通の男なら少女の姿と相まって、誘導されたかのようにな頷いてしまうだろう。

そう確信できてしまつほど、少女の姿は素晴らしい。

艶やかで煌びやかな輝きを放つ白金の髪。

透き通るような翡翠色の瞳。

鼻筋がすっと通っていて道を歩けば十人が十人振り返る整った顔立

そんな美しい少女が上目遣いでこちらをうかがい、懇願してくるのだ。

ほとんどの男が魅了され、頷いてしまうことは明白だ。

だが俺は普通ではない、らしい。

らしいというのは自分ではいたつて普通だと思つているのだが悪友たち曰く、理性が強すぎる、人間の精神とは思えない、と。確かに、誰しもが魅了されるであろう少女の懇願を見ても心が少しも動かないのだから理性が強すぎるというのはあながち間違いでもないのか。

「勇者さま？」

少女の呼びかけに思考の海から我に返る。

どう考へても少女が口にする”勇者”とは俺のことを指しているとしか考えられない。

「えつと…確認だけ、勇者って俺のこと？」

念のため確認すると少女は、はい、そうです、としつかりと頷いてくれやがった。

薄暗さによつやく目が慣れてきて周囲の状況を視覚に捉えることができるようになつた。

キヨロキヨロと落ち着きなく見えるように周囲を見回し、今いる場所の広さとそこにいる人数を把握する。

今いる場所は一辺がだいたい五十メートル程度の正方形の部屋のようだ。

人数はざつと数えて三十人ほど。

どごその小説の主人公みたいに鬪争と逃走する、なんてことができるような人数ではない。

眼を閉じ、右手で頭を搔きながら考へること数瞬。

意を決した俺は眼を開け、田の前の少女を見つめる。

「期待に添えるかわからないけど、俺でよければ力になるよ」

囁まずに言えた言葉はそれだけ。

田の前の少女は頬を朱に染め、瞳には涙が今にもこぼれんばかりに溜まっている。

言葉が出ないのか少女は深々と頭を下げてきた。

少女はひざまずいているので俺に対して平伏しているようにも見える。

周囲を取り囲むように立っていた人たちは少女の様子を見て慌てたようにひざまずき、頭を垂れた。

その後、俺は案内されるままに部屋から出て別の部屋へと案内された。

案内された部屋で待っているより頼まれた俺はふと自分の恰好や持ち物が気になり、調べることにした。

「服は変わつてない」

姿鏡に自身の全身像を写し、変化がないことを確かめて言葉にする。ワール地の黒いパーート、田の襟付きシャツ、インナーはハイネットクの長そで。

黒革のベルトに濃い青のジーンズ。

くすんだ茶色で足首まであるハイカットなレザーシューズまで、全身を見回してみたが何も変わってはいない。

肩から斜め掛けしたショルダーバックもそのまま。中身をざつと見てみたが特にくなつたものもない。

「やっぱりケータイは圈外か。ま、仕方ない」

ポケットから携帯電話を出すも画面に映るのは圏外の一文字。
今後のことを考え、携帯電話の電源は切つておくことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8245y/>

異世界からの勇者と闇の皇女

2011年11月24日19時53分発行